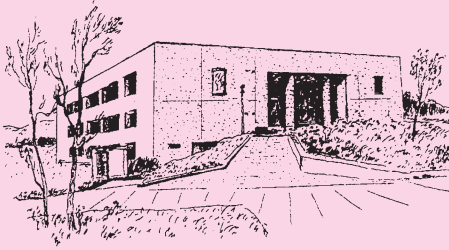


福島大学附属図書館報

No.48 2013.4.1 発行

書 燈



〒960-1293 福島市金谷川1番地  
TEL (024) 548-8087  
<http://www.lib.fukushima-u.ac.jp/>  
携帯電話版  
<http://www.lib.fukushima-u.ac.jp/i.htm>

福島大学附属図書館

## 重たい本

行政政策学類 中川 伸二

2年前の3月11日午後2時ごろ、わたしは、翌日に控えた後期日程のための入試委員としての作業を終えて、研究室にいました。特に理由があったわけではなく、「年度末だし研究室の片づけでもしよっか。」と思い立ち、本や書類の整理を始めました。もちろんそのときには、数十分後に、そうした作業がまったく意味のないものになるなんて想像すらできませんでした。

地震によって研究室の床は、書棚から崩れ落ちた本ですっかり埋め尽くされました。その後しばらくは、片づける気力もなく、余震も続いていたので、そのままでしたが、「これではいかん」と思い立ち、夏を前に研究室の片づけを始めました。

まずやるべきは、40センチくらい積もった本をどけて、研究室入口からの通路を確保することだと思い、その作業に入りました。作業を続けるうちに、一番上の層になっている本は、非常に古い本なのだという事に気づきました。書棚の前面にあった本から先に崩れ落ち、奥にあった本ほど後に落ちてきたからです。

一番上の「古層」で、ミルトン・メイヤー『彼らは自由だと思っていた——元ナチ党员十人の思想と行動』（未来社、1983年）を見つけました。「懐かしい」というか、その存在すら忘れていました。福島大学に赴任した時処分したと思い込んでいました。

そもそもメイヤーの本を買ったのは、学部生のときに参加していた「政治理論研究会」というサークルで、輪読のテキストとして読んだ丸山真男の『現代政治の思想と行動』に引用されていたからです。もちろん丸山は原著を読んだ上での引用です。『思想と行動』は600頁弱の大著でありながら増補版だけでも150刷を

超え、新装版になった現在もまだ売れ続けています。

丸山は、「現代における人間と政治」という章で、ナチ体制下で起こった「外側からみたらおそろしくドラスティックな打撃の連続」であったものを、「内側の住人」である一般のドイツ国民がどう受け止めてきたのかという疑問への手がかりをメイヤーの本に求めます。それは意外にも、「内側の住人」にとっては「目立たない、歩み歩きの光景の変化」でしかなかったのです。「ほんのちょっと悪くなっているだけだ」と思っているうちに、いつのまにか自分の住んでいる世界は、かつて自分が生まれた世界とは似ても似つかぬものになったというのです。

丸山は、こうした状況に対して外側から批判しても「内側の住人」にとっては単なる「おどかし」にしかならない、「内側」にいて同調化せずしかも「外側」からのおどかしでもない道を探ろうとします。それが有名な「境界に住む」ということです。「内側の住人と『実感』を傾け合いながら、しかも不断に『外』との交通を保ち」、「まるごとのコミットとまるごとの『無責任』のはざまに立ちながら、内側を通じて内側をこえる展望をめざす」と結んでいます。

学生の当時は、いかにも知識人特有の言い回し、レトリックだなと思っていました。しかし原発事故に至るまでの状況を省みるならば、この「境界に住む」というスタンスは、思考のあり方として、とても難しいけれども重要なことだと認識を新たにしています。その意味ではやはり丸山の問いかけは現代においても通ずる重たいものなのでしょう。ちなみにこの本は棚から落ちませんでした。やはり重たい本だったようです。



附属図書館長 高橋 隆行

また、今回の原発事故に関して、福島県民はさまざまな不安を抱えています。その原因のひとつは、「よくわからない」ということに起因しているものと思います。福島大学附属図書館は、原発ならびに放射能に関する書籍を精力的に収集し閲覧できるようにしています。特に今年度は、本学の「うつくしまふくしま未来支援センター」の協力を得て、千冊近い関連図書を購入いたしました。本館は、学生や教職員のための図書館であるの



みならず、地域の図書館として地域の方々にも広く利用の門戸を開放しております。是非ご活用ください。



－震災関連資料コーナーの図書・本学の刊行物や教員著作物－

## 特設コーナー「今、知りたいこと」から「震災関連資料コーナー」へ

附属図書館 利用者サービスチーム

東日本大震災被災後、段階的に図書館サービスを再開していく状況の中で、特設コーナー「今、知りたいこと」がスタートしました。

震災/原発/ボランティアに関連する図書約100点、徐々に資料点数を増やしながら、平成23年5月25日～平成24年3月26日の期間、ご利用いただきました。

小さな特設コーナーから始まった震災関連資料の収集と提供でしたが、本学うつくしまふくしま未来支援センターと協働し、平成24年度より新たに「震災関連資料コーナー」として開架閲覧室1階（学内刊行書コーナー対面）にリニューアルしました。背表紙の「F」ラベルが目印で、2013年3月現在では約2,000点のコーナーに成長しました。「震災関連資料コーナー」に置かれているものは、本学での学習教育活動や福島で生活していく方々に活用していただけることを意図して、震災/原発/ボランティアのテーマに留まらず、郷土/教育/科学/防災/産業など様々なテーマの資料群となっています。

「震災関連資料コーナー」が、学内外の方にさらに幅広くご活用いただけるよう、今後も関連資料の収集などに継続して取り組み、充実を目指していきます。



## 震災記録を図書館に

**東日本大震災に関する資料をご提供ください！** 附属図書館 震災関係資料収集担当

図書館では、東日本大震災に関する資料を集めています。

これらの資料は、この大震災の記録のひとつとして後世に引き継がれていく貴重な資料であり、今後の災害対策などにおいて広く活用することのできる重要な資料となります。

震災に関わる資料をお持ちの方は、ぜひ図書館までご連絡ください。皆様からのたくさんのご提供をお待ちしています。

### 収集対象

- ・東日本大震災に関する資料全般
- ・調査資料・報告書などのほか、ポスターやパンフレットなど形態は問いません。
- ・紙媒体でも、WordやPDFなどの電子媒体でも可です。
- ・提供していただいた資料のうち、学内の活動でインターネット上に公開して構わないもの（著者の許諾が取れているもの）は、福島大学学術機関リポジトリへ掲載します。

詳しくは下記までご連絡いただくか、図書館カウンターまでお名前・連絡先を添えて資料をお持ちください。

【連絡先】福島大学附属図書館 震災関係資料収集担当

電話：024-548-8085(内線2606) FAX：024-548-2377(内線2006)

e-mail：shinsai@lib.fukushima-u.ac.jp

## 『交通まちづくりの時代』

うつくしまふくしま未来支援センター

吉田 樹

思い出の一冊ということで、私の専門である交通まちづくりに関する比較的読みやすい本をご紹介しますと思います。

この本が出版されたのはちょうど10年前（2002年）になりますが、私が大学院に入学した年でもありました。修士論文のテーマや研究手法を考えるために、書店や図書館に立寄ることも多かったわけですが、神田・神保町の某大型書店で出会った一冊がこの本『交通まちづくりの時代—魅力的な公共交通創造と都市再生戦略』です。

著者である市川嘉一さんは、日本経済新聞産業地域研究所の主任研究員をされている方ですが、専門情報誌「日経グローバル」(この本の出版時は「日経地域情報」というタイトルでした)のなかでも、交通やまちづくりに関する記事を数多く執筆されています。今回ご紹介する本は、市川さんが国内外で取材した公共交通に関する記事をもとに書かれたものです。

さて、この本の「まとめ」にあたる第6章には、このような一文があります。

「欧米にほぼ共通して言えるのは、公共交通運営に関する「独立採算の原則」はもはや捨てており、狭義の交通事業としての採算性ではなく、環境負荷の軽減、移動しやすさ、あるいは都市全体が息長く活力を持ち続ける持続可能性といった「Quality of Life」にかかわる新たな価値指標に基づいた「地域経営としての採算性」を重視していることである。」

実は、この2002年には、わが国の公共交通政策の転換点となる出来事がありました。それは、乗合バス事業の規制緩和です。皆さんがふだん見かける路線バスですが（最近では、金谷川駅でも見かけるようになりましたね。私が福大（いまの行政政策学類）に入学した14年前にはありませんでした。）、わが国の場合は、バス事業者による独立採算が前提とされてきました。利用者が多く黒字のバ

ス路線で得た利益を不採算（赤字）路線の補てんに使う（これを内部補助と言います）ことが原則とされ、そのかわりにバス事業者には事実上のエリア独占が認められてきました（福島市内の大半の路線バスが福島交通一社で運行されているのもそのためです）。しかし、モータリゼーション（生活のなかで自動車利用が浸透すること）の進展などを背景に公共交通離れが続くと、そもそも黒字のバス路線自体が少なくなり、内部補助のしくみが成り立たなくなりました。こうしたなかで実施されたのが

規制緩和でした。規制緩和によって、バス路線への参入や退出が自由になった一方で、不採算の公共交通をどこまで維持するかについては、地方公共団体や地域住民の判断に委ねられるようになったわけです。

こうしたパラダイムシフトのなかで求められたのが、筆者が指摘する「地域経営としての採算性」を重視するという考え方であり、それをどうやって計量するのかが大きな課題となって突きつけられました。私

は、この一文をきっかけに、自らの研究テーマを発想したわけです。

しかし、市民の生活活動や都市の持続可能性をどのような尺度で計量するのかは、学際的かつ複雑な課題でもあり、修士論文や博士論文で明らかにした部分はわずかに過ぎません。おそらく、私の研究者人生のなかで、常にチャレンジし続ける課題であると言ってもよいでしょう。

本は、時として、私たちに新たな発想のヒントを与えてくれます。インターネットでも簡単に情報が手に入る時代ではありますが、ぜひ、図書館で書店で、多くの本に触れてください。そして、クルマやバイクを好んで移動手段としている皆さん。たまには、鉄道やバスから眺める風景もいいですよ（環境にも、意外にお財布にも優しい！）。賢く移動手段を使い分けるライフスタイルを探してみてください。



**『交通まちづくりの時代』**  
**魅力的な公共交通創造と都市再生戦略』**

市川 嘉一 著 ぎょうせい 2002.4



## 海外の博物館事情～ベルギーのイーペルより～

人間発達文化学類

霜鳥 慶邦

数年前から本格的に取り組んでいる第一次世界大戦の記憶の研究のためにこれまで現地調査で訪問したイギリス、ベルギー、フランス、オーストラリアのうち、今回は、ベルギーの博物館について紹介したい。

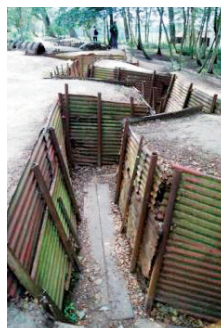
大戦研究のための重要な拠点となるのが、大戦の激戦地だったイーペルという小さな町にあるイン・フランドース・フィールド博物館だ。博



繊維会館。この一部が、  
イン・フランドース・フィールド博物館

物館には大戦の悲劇を物語るたくさんの展示品があるだけでなく、貴重な文献も保存されており、閲覧することができる。文学研究者ならば、部屋に閉じこもって古い文献と向き合って一日を過ごすのが普通なのだが、私の場合はちょっとちがう。というのも、大戦の記録と記憶が保存されているのは、決して博物館の内部だけではないからだ。かつて激戦地だったイーペルの周辺には、たくさんの博物館、記念碑、墓地、戦跡が点在している。それらすべてが研究のための重要な材料となる。いわば、イーペルの町の周辺全体が、巨大な博物館と言える。私は、自転車をこいでそれらのスポットを回る。毎日40km近く走る（自分の方向音痴ぶりにあきれながら）。文学研究には、筋力と体力と方向感覚が不可欠だ。

イーペルからしばらく自転車をこいだ所にあるサンクチュアリ・ウッド博物館には、大戦で使用された塹壕が今でも保存されている。初めて塹壕の中を歩いたときの恐怖心と鳥肌を今でも覚えている。



サンクチュアリ・ウッド  
博物館の塹壕

さらに自転車をこぐとたどり着くのが、世界最大の英連邦軍共同墓地であるタイン・コット墓地だ。

ここには11,954もの遺体（そのうちの8,367が身元不詳）が眠っている。

日中ひたすら自転車をこいでイーペルに戻り、日が



タイン・コット墓地

沈んだ後も、大戦の記憶をめぐる旅は終わらない。イーペルには、遺体未発見の連合軍兵士54,896人の名前が刻まれたメニン・ゲートという大きな門があり、ここでは、1928年以来、第二次世界大戦中の



メニン・ゲート（上）と、  
戦没者追悼の儀式の様子（下）

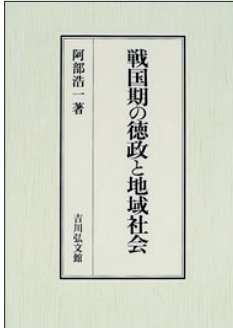
一時期を例外として、毎晩8時に一時通行を止めて戦没者追悼の儀式が行われている。誰もがこの儀式に参加でき、私もイーペル滞在中は毎晩参加する。たくさんの参加者の中でも特に印象的なのが、世界中の様々な国からやって来る若

い学生たちの団体の多さだ。メニン・ゲートとは、大戦の記憶を単に「保存」するだけでなく、儀式を通して若い世代に記憶を「教育」「継承」する場であることを強く感じる。

さて、世界は1年後に、第一次大戦勃発100周年という決定的瞬間を迎えようとしている。この瞬間に向けて、イン・フランドース・フィールド博物館は大規模な改装をして2012年6月に再オープンした。博物館の再生とともに、大戦の記憶も現代的意味を帯びてよみがえったことだろう。新たに生まれ変わった博物館と大戦の記憶に再会できる日を今から楽しみにしているところである。そして今後も、体が元気に動くうちは、かつての戦場でがんばって自転車をこぎ続けたいと思う。



## 学内教員著作寄贈図書



### 『戦国期の徳政と地域社会』

吉川弘文館 2001.12  
阿部浩一著

日本史の中には、現代人の目からするとあまりにも奇異に見える事象がいくつも存在します。その最たるものの一つが中世の「徳政」でしょう。買ったはずの土地が元の持ち主に戻っていき、貸したはずのお金が牽引きにされることが、なぜ善政を意味する「徳政」という言葉で表現されるのか、歴史家たちはその説明に苦慮してきました。

そんな「徳政」に見事なまでの説明を与え、学界に衝撃を与えたのが、日本中世史家の笠松宏至氏と勝俣鎮夫氏でした。学問としての日本史の世界に足を踏み入れたばかりの私は、その歴史像に瞬く間に魅了されてしまいました。到底真似はできないけれど、同じテーマを自分なりに考えてみたい…そんなささやかな願いから始まった研究の歩みを博士論文にまとめ、上梓したのが本書です。もう10年以上前のものになりますが、本学への着任を機に寄贈させていただきました。

専門書なので気軽に読める雰囲気のものではありませんが、何かの折に図書館で手に取っていただき、行政政策学類にもこういう歴史系教員がいることを知ってもらえれば幸いです。



### 『小さな自治体の大きな挑戦—飯舘村における地域づくり』

八朔社 2011.12  
境野健児 千葉悦子  
松野光伸編著

今回の原発事故で、福島県飯舘村の名前は、全国に知れ渡ることとなったが、飯舘村は、それ以前から、小さな自治体でありながら、人間性あふれるユニークな地域づくりに取り組んできたことで知られていた。

本書は、四半世紀におよぶ飯舘村の地域づくりについて、福島大学の多様な分野（行政学、法社会学、社会計画論、社会福祉論、地域環境論、生活構造論、地域教育論）の研究者が、共同で学際的な調査研究をおこない、多面的・多角的な検討を加えたものである。

本書は、小さな自治体における地域づくりの課題と飯舘村の地域づくりの展開過程、地区・集落（行政区）を基盤とする取り組み（地区別計画の作成と事業化、直売所・女性起業、自然資源の活用、伝統行事・芸能の継承・復活など）、社会教育、福祉、環境、子育て・教育、職員参加の分野での政策展開、の3部構成からなり、小さな自治体を持つ可能性を明らかにしている。



### 『アメリカ労使関係の精神史—階級道徳と経営プロフェッショナリズム』

木鐸社 2011.5  
富澤克美著

本書は、博士論文を手直しして上梓したものです。19世紀末から20世紀20年代までのアメリカ労使関係を人間論的アプローチから分析した専門書です。具体的には「労働者集団と経営学の相互浸透に焦点を当て、アメリカ企業社会における労使関係の変貌を精神の面から明らかにする」ことを試みています。

フレデリック・W・テイラーやメアリ・P・フォレットといった経営学者も出てきますが、少し学術的すぎて手が出ないかも知れません。「階級道徳」とか「経営プロフェッショナリズム」という聞き慣れない学術用語も出てきますのでそれだけで敬遠されるかも知れません。

しかし、こうした新たな概念をもちいることによって、はじめて明らかにできることがあります。今まで見えてこなかった労使関係の構造や経営管理思想の新たな発展の筋道をわかることはとてもエキサイティングですよ。そしてそうした事実を知ることは日本の経済や経営を理解する上でも大変意味のあることです。アメリカ経済や経営の歴史、あるいは経営学に関心がある人だけではなく、日本経済や経営の歴史に関心がある人にも是非読んでいただきたい本です。



## 図書館相互協力による協定「ふくふくネット」 附属図書館 利用者サービスチーム

平成23年12月8日(木)に、福島県立図書館、福島大学附属図書館、福島県立医科大学附属学術情報センター3館による相互協力協定(通称:「ふくふくネット」)締結調印式を、福島県立医科大学附属学術情報センターに於いて行いました。

平成21年4月に福島県立図書館と福島大学附属図書館の間で図書館利用の相互協力に関する協定を結び、所蔵資料の相互利用を中心に協力を行ってきました。県立図書館のアクションプランに沿って、平成22年9月から福島県立医科大学学術情報センターも含め相互協力館の拡大について実務者レベルの協議、さらに、資料の相互利用の試行運用を行い、その結果を受けて、あらたに3館での相互協力に関する協定を結びました。

この協力協定により、3館で所蔵する資料は一部を除き、資料取り寄せ(最寄りの図書館へ他館所蔵資料を取り寄せる)や遠隔地返却(他館で借り出した資料を最寄りの図書館窓口へ返却)を郵送料等の負担無く行うことができ、公共図書館・大学図書館・医学系大学図書館の各々の

特徴を活かして利用者へのサービス充実を図っています。

資料の相互利用は県立図書館の県内「巡回車」と福島大学の「町行き車」の運行を調整して1週間に1~2回搬送を行っています。現段階では資料搬送を一元的に管理するシステム

は無く、各館が運用している図書館システムでの管理と相互の連絡体制により運用されています。

協力内容は資料の相互利用だけではなく、資料の他館の場を借りて自館資料の企画展示や職員の研修交流等も計画されています。

協定締結式を平成23年4月に行う予定でしたが、3月11日の東日本大震災の影響により協定締結式は延期されました。各館が復旧・復興し相互協力も実働した状況の中で、平成23年12月8日(木)に締結調印式を行いました。

「ふくふくネット」は3館の頭文字に「ふく」の字がつくこと、利用者の皆さんに図書館を使っていただき「幸福」になっていただきたいことから命名されています。



## ふくふく ネット交換展示

「ふくふくネット」連携事業のひとつとして、福島県立図書館と当館の資料交換展示を実施しました。

### ◆「ふくしま一目瞭然!」

平成23年10月6日~12月1日(県立図書館蔵書を当館に展示)  
[http://www.library.fks.ed.jp/ippan/gyoji/tenji/23fukushima\\_itimokuryouzen\\_fukudai.html](http://www.library.fks.ed.jp/ippan/gyoji/tenji/23fukushima_itimokuryouzen_fukudai.html)

福島県立図書館のユニークな地域資料の一部を、前期・後期の2回にわけて紹介。

前期:『観光の福島県 福島県史蹟名勝鳥瞰図』

『福島県写真帖』ほか

後期:『福島第一原子力発電所および福島第二原子力発電所の事故による原子力損害への本補償請求書類』

『福島県の鉄道から見た 東日本大震災』

『郷土かるた』『ふくしまお国自慢カルタ』ほか

### ◆「福島大学発!文壇に羽ばたいた二人の卒業生」

平成23年12月2日~12月27日(当館蔵書を県立図書館に展示)  
[http://www.lib.fukushima-u.ac.jp/tenji/fknet\\_exhibition201112.html](http://www.lib.fukushima-u.ac.jp/tenji/fknet_exhibition201112.html)

福島大学を卒業した詩人和合亮一氏、作家中村文則氏の作品・著作を紹介。両氏からの展示に対するメッセージを蔵書とあわせて展示し、パンフレットに掲載。





## 学生による選書ツアーを試行（報告）

附属図書館

晴天に恵まれた2012年2月20日。図書館職員3名と学生4名は、中合にある岩瀬書店を訪れた。「学類や分野にこだわらず、学生の学習や研究の参考になるものを選んでください」その声に、思い思いの棚へと向かっていく学生たち。経済、行政、歴史、生物……さまざまな本を実際に手に取りながら選んでいくその目は、学術的好奇心で輝いていた。

学生用の本は、教職員による選書と学生からの備付希望によって、決められた予算の枠内で購入されている。しかし、それだけで本当に学生が必要としている本を選べているのだろうか。学生はどんな本を読みたいのか、何に興味があるのか。それを知るために、学生と一緒に本を見ながら選ぶのはどうだろう。そう考え、職員と学生が共に書店を訪問し実際に手にとって学習に必要な図書を選書する「選書ツアー」を試行することにしたのである。今回はあくまで試行のため、参加者は図書館の業務経験がある院生を含め、図書館をよく利用する常連から選んだ。選書



の時間は1時間、予算は2万円程。当日は「この分野の本が図書館に少ない」など様々な話を聞くことができた。予算の都合上すべてを購入することはできなかったが、学生と職員が相談しながらスムーズに本を選ぶことができたと思う。参加した学生は突然の依頼であったにも関わらず、研究や学習に大いに役立つ良書を選んでくれた。その成果は是非、展示されている図書を見て確かめて欲しい。POPも参加者に作っていただいたもので、どれも「読んでみようかな」と思わせる力作揃いだ。

### 「選書ツアー」の感想

（ツアー試行時 行政政策学類 中野鳩子）

選書ツアーに参加して、図書館や本がより身近な存在になりました。自分が選んだ本が学術書に混ざって図書館に並べられるので、いい緊張感の中で真剣に本と向き合う機会になったからです。また、他学類の学生も参加するので、自分の専門分野以外の本と関わる機会にもなります。同じ立場の学生に対して本を選んだ理由を直接聞けるので、自分の思考の幅が広がりました。加えて、同伴する司書さんに選び方などを聞くことで、自分の学びを深める技法も身につきました。なので、「大学図書館ってちょっと敷居が高いな」と思っている学生さんこそ、選書ツアーの参加がおすすめかなと思います。

## 目次

- 巻頭言「重たい本」…………… 中川 伸二(1)
- 〈特集〉東日本大震災と図書館
  - 震災、そして地域の大学附属図書館の役割 …… 附属図書館長(2)
  - 特設コーナー「今、知りたいこと」から「震災関連資料コーナー」へ …… 利用者サービスチーム(3)
  - 東日本大震災に関する資料をご提供ください！ …… 震災関係資料収集担当(3)
- 思い出の一冊：『交通まちづくりの時代』 …… 吉田 樹(4)
- 海外の博物館事情～ベルギーのイーペルより～ …… 霜鳥 慶邦(5)
- 学内教員著作寄贈図書の紹介
  - 『戦国期の徳政と地域社会』…………… 阿部 浩一(6)
  - 『小さな自治体の大きな挑戦－飯館村における地域づくり』…………… 松野 光伸(6)
  - 『アメリカ労使関係の精神史－階級道徳と経営プロフェッショナリズム』…… 富澤 克美(6)
- 図書館相互協力による協定「ふくふくネット」…………… 利用者サービスチーム(7)
- ふくふくネット交換展示 …… 利用者サービスチーム(7)
- 学生による選書ツアーを試行(報告) …… 附属図書館(8)